

### 「故、山崎君を偲ぶ / 津江から山崎への手紙」

1月22日(日)の朝、津江から電話があった。山崎君の訃報だった。3年前、鴨志田が逝ったのは1月19日、その3日違いである。同期の仲間をまたひとり失い、何とも辛い。その前週の日曜日には、第3回鴨志田追悼丹沢バカ尾根登山を実施したところだった。昨年も一昨年も、山崎は「バカ尾根は無理だけど、2次会には出席する」と言って来てくれた。その時、皆が彼に「次回は、是非とも一緒にバカ尾根を登ろう」と誘ったところ、山崎は「いやいや鎌倉の天園も良いよ!」と言って皆を和ませてくれた。心暖まる本当にいい奴だった。今年、昨年末から入院しているので来れないとのこと、心配していたが、まさかこんなに病が進行していたとは知らなかった。

告別式に列席した。読経、焼香と進み、出棺の前の準備では皆が棺の中を生花で飾っていた。津江が花と一緒に、一枚の手紙を棺に納めているのを見た。同時に、その同じ一枚を俺にも手渡してくれた。それをここに掲載する。

山崎へ

2017年1月26日 津江

昨年12月7日に自分の病気が判って、その夜に津江に電話して12月17日のYWゴルフコンペの幹事代役を頼み、その17日に人生初めての入院生活に入り、そのまま本当にあっという間に逝ってしまいやがった。ただ、短い間だったけど、転移した肺の調子が悪く、奥さんや子供達の手厚い看護を受けながら、癌と闘っていた山崎を誇りに思っている。一時は肺の癌も消え始めているという話を聞いて期待していたけど、先週の18日頃から容態が急変し、いつ何が起きてもおかしくない状態になり、時々薄れる意識の中でも、亡くなる前日も、まず肺を治してそれから腎臓を治すんだ、という意味を示していた。

思えば山崎との出会いは、39年前に横浜国大ワンダーフォーゲル部で一緒になり、その頃の体重は山崎が58キロで、津江が62キロだった。大学2年になる前の春合宿の鈴鹿山脈で初めて同じ隊になり、強風でテントを飛ばされ、満天の星を一緒に眺めていた。3年のメインの南アルプス縦走の10日間の夏合宿では男だけのメンズ隊でリーダー、サブリーダーの仲で、標高3000メートル以上の農鳥小屋の近くで女子大のパーティーの近くにテントを張ったら、嵐が来て、風の通り道で、ここでも1番先にテントが潰れてしまい、1年、2年を連れて避難小屋に駆け込み、無理をしたため山崎が高熱、津江が膝の痛みが生じ、下級生の前では見栄を張りながら、2人になると「本音会議」を開き、「熱はどう?」「膝はどう?」とやっていたことが懐かしく思い出されるよ。

奇しくも就職先が同じ、当時の東洋信託銀行に入社することになり、大学クラブ、会社も同期の関係で人生の大部分を一緒に過ごして来たように思える。13年前に、縁があって津江が現在の不動産会社に転職した時も、会社の同期をまとめて送別会をしてくれ、ワンゲルの仲間を集めて壮行会をやってくれたのも、みんな山崎だった気がする。その頃から山崎は、忙しい仕事のかたわら、仕事以外の能力も存分に発揮し始めていた。

50代になってからの山崎の活躍は目覚ましいものがあり、ワンゲルOB会の監査役の役員としての仕事よりも、人をつないで、自分のやりたい飲み会や企画を実行する天才だった。実際、ワンゲルだけでなく多くの人を巻き込んで、鎌倉の天園ウォーキング、YWオープンゴルフコンペ、野毛会、旨酒会、金沢弾丸ツアーを企画実行した。その大部分に巻き込まれてしまい、少ないプライベートな時間を共に過ごせたこと、当時は迷惑にも思ったけれど、今になってみると本当に何も考えないノンストレスな時間を山崎と一緒に過ごせたことで、人生が楽しく明るく過ごせたことを感謝しているよ。

特に、地元の三浦半島、京浜急行を愛し、この金沢文庫～鎌倉アルプス(標高150メートル程度)を抜けて鎌倉の奥の院の天園に抜ける天園ウォーキングは、ワンゲルだけでなく、会社の同期やその友達、飲み屋で仲良くなった同年代の人にまで輪を広げ、通算で100回以上実施していた。

(中略:天園ウォーキングでの出来事が続くので割愛)

そんな山崎がこの世にいないこと、まだ信じられない。亡くなった当日の夕方、斎場から自宅に車で向かった際に、いつも天園ウォーキングでスタートしていた横浜市金沢自然公園の脇を通った。いつか山崎と一緒に歩いた鎌倉天園に続く道が夕日に照らせれ、登ったこともなくせに大好きだった富士山が遠くに見えたその

時に、「ああ、山崎は逝きやがったんだ」と切なくなった。

最後に、本当に奥さんには感謝しろよ。最後の最後まで、山崎のやりたい事を受けとめて見守ってくれたぞ。ワングル同期に友達も多い奥さんのことは、ワングルの仲間も大事にするよ。それから二人の子供たちはしっかりしているが、これから俺たちが山崎のようにいろんな局面で「押し掛けおじさん」をやるから任せてくれ。通夜には亡くなった中丸の息子たちも来てくれたよ。うちの子供たちも含めて、みな「山崎おじさん」が大好きだった。

俺たちももうすぐそっちに行くけど、先に亡くなったワングルや会社の仲間にはきっと歓迎されていると思うから、俺たちが行く前に、しっかり地ならしをお願いするよ。本当に山崎のおかげで楽しい人生が過ごせてきたよ。山崎、ありがとう。(完)

あれから早2ヶ月が経った。OB会報の編集委員会から追悼文掲載の話が来た時に、この津江から山崎本人に宛てた手紙に優る追悼文はないと思い、津江に連絡して掲載の了解を得た。こうして再読してみてつくづく感じるのは、山崎は、一緒にいる者に余計な気を遣わせない、そんな優しさを備え持った人ではなかったかということ。それが津江にとってもノンストレスな時間となっていたのだろう。津江や俺だけではない、皆にもそんな時間があったはずで、本当に彼に感謝したい。

その山崎の優しさは、卒業して社会人になっても変わらない。ここ数年はワングルOBの会合などで会う機会が多かった。幹事役の彼は、巨大な連絡網のハブにいて、会合の案内メールは殆ど彼からの発信だった。出席できない旨の連絡にも、彼は丁寧に「了解、次回は来てくれ」とメールで返信していた。会合当日の彼は、主に司会進行役だった。何か目立って、会を仕切るような司会進行ではないが、同時に出席者全員に配慮が行き渡る彼らしいものだった。本当にありがたい。その頃の彼の様子は、前述の津江からの手紙の通りであり、ここでは割愛し、俺から最後にひとこと追記したい。

3年前に亡くなった鴨志田が、生前に「春の桜なら、これでもかと咲き誇る桜並木ではなく、山並みの新緑の木々に混じる山桜が良い」と言っていたことを耳にした同期の立浪(富山県在住)は、地元特産の「啓翁桜」(ヒガンザクラの種で、冬でも室内に活けて観賞できる桜)をバカ尾根追悼登山の常連である津江に贈った。

津江がその宅急便を受け取ったのは、山崎の亡くなる前日。その桜は、津江の手により通夜、告別式の祭壇に飾られ、そしてあの手紙と一緒に棺に納められた。鴨志田の想いが、立浪と津江を經由して山崎に届いた桜である。



写真① 2年生のL養成合宿での集合写真(1979年10月、奥秩父)  
(向かって中央右にいる赤シャツでないのが山崎君)

山崎よ、天国に行ったらその桜を持って鴨志田を訪ねてくれ。きっと喜ぶはずだ。中丸もいるだろう。そして3人で花見でもしながら、酒でも酌み交わしていてくれ。俺たちも、もうすぐそちらに行くから。

棺に納められた津江から山崎への手紙の最後のくだりを読み、俺もそんな気持ちになった。



写真② YW「おとこ会」で幹事役として活躍する山崎君（2011年9月）  
（左には元気な頃の鴨志田君も写っている）